

「純粋痴呆」をご存知ですか？



あいわクリニック
(国立沖縄病院名誉院長)
源河 圭一郎

85歳以上の四人に一人が罹患する「認知症」は、高齢者の増加とともに今後ますます身近な病気として、医療・介護の両面から適切な対応が求められている。診療の現場で高齢者が受診する機会が多く、認知症の早期発見・診断などを担う重要な存在である一般医師を対象にして、沖縄県でも平成19年度から「かかりつけ医認知症対応力向上研修会」を開催し、数少ない認知症サポート医が豊富な経験を生かして講師を務める研修が県内各地で行われている。

「認知症」の進行とともに家族や介護職員の負担が増大し、介護疲れや虐待から起こる悲劇がマスコミに取り上げられる事態は、世相の反映そのものである。「認知症」に必ずみられる症状として物忘れや判断力の低下などの中核症状と、環境や人間関係などに起因する抑うつ、妄想、幻覚、不穏、徘徊などの周辺症状がある。認知症患者本人や介護者を苦しめ、深刻な介護地獄をもたらすさまざまな問題行動は、周辺症状に含まれる。

認知症、とくに周辺症状は社会環境によってどのような影響を受けるであろうか。この問題についての示唆に富む研究があるので紹介したい。

その調査研究は琉球大学精神科(当時)の真喜屋 浩先生が中心になり、日本復帰3年後の

昭和50年に沖縄の農村で行われた。対象となったのは佐敷村(現・南城市)在住の65歳以上の高齢者708名である。報告によると、明らかに「老人性痴呆」と診断された人の中で、うつ状態や幻覚・妄想状態などの周辺症状を示した人は皆無であったという驚くべき事実がある。同じ頃に東京で行われた調査では、「痴呆老人」の半数に周辺症状がみられたという。真喜屋先生は、「佐敷村のような敬老思想が強く保存され、実際に老人があたたかく看護され尊敬されている土地では、老人に精神的葛藤がなく、たとえ器質的な変化が脳に起こっても、この人達にうつ状態や幻覚・妄想状態は惹起されることなく、単純な痴呆だけにとどまるのではないか」と考察している。

周辺症状のない穏やかな痴呆状態を学術用語で「単純痴呆」と呼ぶが、臨床医としての立場から終末期医療に取り組んでいる大井玄東名誉教授はこれを「純粋痴呆」と名付けて、真喜屋先生の報告を高く評価するとともに、「幸せで穏やかな痴呆」が生まれる背景に言及している。現在のような都市型の効率重視社会では「純粋痴呆」の生まれる素地は無いと見るべきであろう。深刻な問題行動は、プライドを傷つけられ、ストレスに曝された高齢の認知症患者に起こりやすいと思われる。

30年前の日本復帰前後の沖縄には、痴呆があっても社会生活を営むことが出来るゆったりとした時間が流れていたと推定される。人情に厚く、敬老精神に溢れ、痴呆老人が環境に順応し、人間関係から生じるストレスが最小に抑えられた結果、問題行動がほとんどみられない社会が沖縄の農村に実在したのである。しかしその後の本土との急速な一体化によって社会環境が激変した。

周辺症状を伴わず、問題行動と無縁な「純粋痴呆」を取り戻し、記憶力の喪失のみか、時間と場所の見当さえつかなかった高齢者が尊厳ある生を全うできる共同社会が沖縄に再び到来する日を夢見ている。

参考文献

- 1) 真喜屋 浩：沖縄の一農村における老人の精神疾患に関する疫学的研究、慶応医学 55：503-512,1978
- 2) 大井 玄：痴呆の哲学、弘文堂 2004
- 3) 大井 玄：「痴呆老人」は何を見ているか(新潮新書)、新潮社 2008